

## 7) みかん・三宝柑・びわ栽培に見る歴史的風致

## 湯浅町におけるみかん・三宝柑・びわ栽培

湯浅町が属する有田地方は、「有田みかん」で有名な全国でも有数のみかんの産地である。和歌山県は、平成 25 年（2013）産の出荷量で国内シェアの 19% を占め、全国トップの出荷量を誇っている。

有田川筋には劣るものの、湯浅町においても海沿いの田、栖原をはじめ、吉川、山田、青木、別所の山間部で盛んに栽培が行われており、特に田で生産されている「田村みかん」は、有田みかんのブランドとして著名である。また、栖原では、他所ではあまり見られない珍しい「<sup>さんぼうかん</sup>三宝柑」が栽培されており、さらに田においては、「田村びわ」と称するびわもみかんと並び古くから栽培されている主要な産物である。

平地が少ない湯浅では、これらの果樹は、主に山の斜面を利用した段々畑で栽培されている。この段々畑は、そのほとんどが、近世にみかんが移植された当初から第二次大戦後に到来した「みかんブーム」と位置づけられている昭和 35～41 年（1960～66）頃までの間に開墾されたものである。昭和 38 年（1963）に撮影された空中写真には、山の斜面に広がる段々畑がはっきりと写っている。また、昭和 50 年（1975）の空中写真を見ると、山地の変化はあまり見られないが、平地にあった水田が柑橘類の畑に転用されている様子が見える。これ以降も山林や水田の畑化は緩やかな広がりを見せ、現在もみかんなどの柑橘類やびわが植えられた石積みの段々畑が随所に見られる。



有田みかん



柑橘（左）とびわ（右）の段々畑



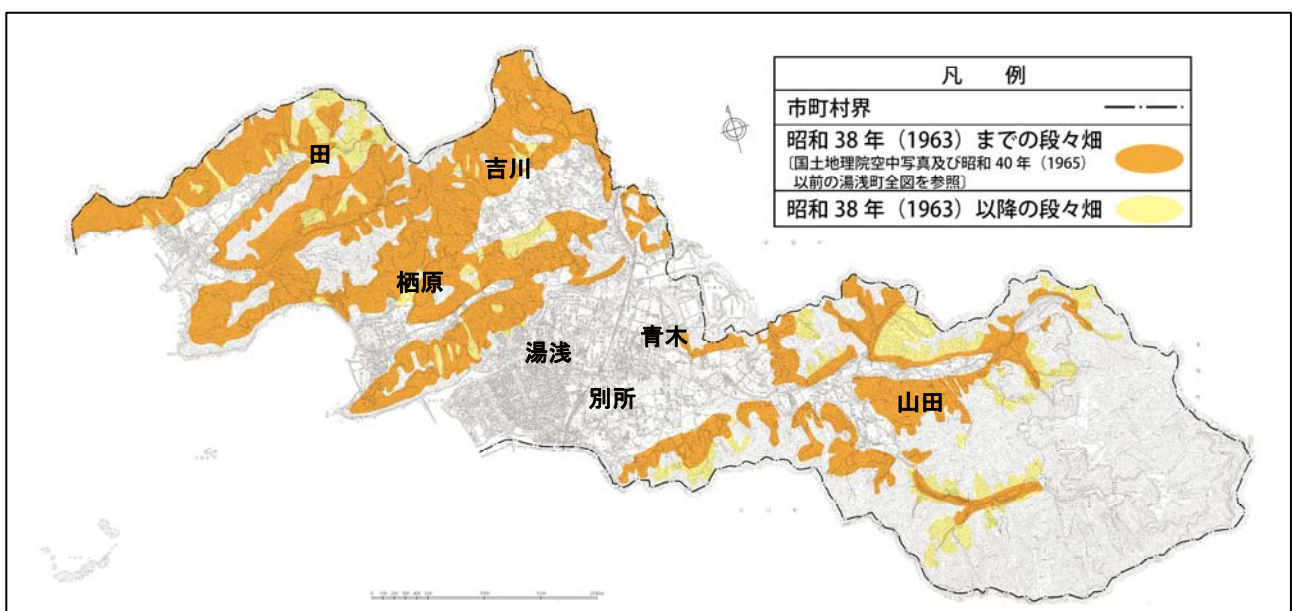
栖原の上空から撮影した空中写真〈昭和 38 年（1963）〉



平地に水田が広がる田の集落〈昭和38年（1963）〉



水田の畑化が進む田の集落〈昭和50年（1975）〉



昭和38年（1963）までの段々畑と現在の広がり

## 有田みかんの沿革

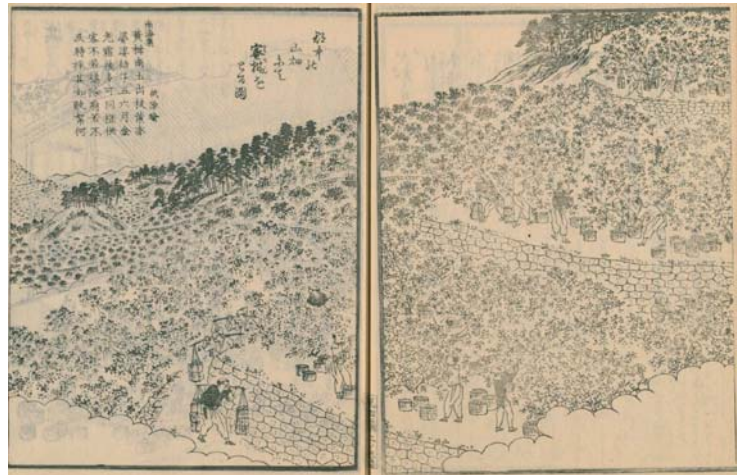
有田地方における柑橘栽培の始まりは、諸説あるが、『南紀徳川史』（明治34年（1901））や『紀州蜜柑伝来記』（享保19年（1734））の記述によると、天正2年（1574）に有田郡糸我莊中番村の伊藤孫右衛門が、肥後国八代より苗木を持ち帰ったことが始まりであるとされている。

慶長年間（1596～1615）の頃には、大坂や伏見といった大都市に向けて出荷がされていたことが知られている。元和5年（1619）に徳川頼宣が紀伊に入ると、国産奨励を積極的に行い、有田郡においてはみかん栽培の奨励保護を進めた。寛永11年（1634）には、宮原組瀧川原村の藤兵衛が江戸に400籠を出荷、他の産地を圧倒し栽培が拡大していった。

この当時のみかんは、「紀州みかん（本みかん、小みかん）」と呼ばれる品種で、今日、有田みかんとして栽培される温州みかんより小ぶりで、種のある品種であった。武家社会の時代には、房ごとにある種が子宝運を良くするとして人気があった。

江戸での販路拡大に伴い、貞享4年（1687）に紀州藩が地元の共同出荷の寄合いである組株の数や問屋の指定を行って、価格の維持に乗り出した。同時に、輸送する蜜柑船には藩旗を掲げることを認め、代金を滞納する問屋には藩命により処罰したため、スムーズな取引が行われたという。また、蜜柑御口銀を徴収して藩の財政を支えた。正徳4年（1714）には27の蜜柑組株があり、そのうち1組は湯浅の組株であったことが知られている。当時のみかんの積出港は北湊（現在の有田市）であり、大いに賑わっていた。

紀州藩の保護により、出荷と販売について優位であったところが、明治の廃藩置県により、制度化されていた出荷のバランスが崩れ、一時は混乱が生じた。有田地方のみかん農家は、明治9年



紀伊国名所図会〈郡中の山畑にて蜜柑をとる図〉



紀州みかん



紀伊国名所図会〈蜜柑乃図其二〉



紀伊国名所図会〈蜜柑乃図其三〉

(1876)に蜜柑方と呼ばれる共同出荷体制の組織の改正、明治14年(1881)の蜜柑方会議の発足、明治17年(1884)には組合への改組、さらには明治38年(1905)に重要物産同業組合法に基づいて紀州有田柑橘同業組合を発足させるなど、近代的な組織作りを進めていった。他所の産地が江戸や大阪へと販路を広げてきた結果、有田みかんは北海道や海外にまで進出することとなった。

明治に入ると、これまでの紀州みかんから、温州みかんへの転換が起こる。温州みかんは、寛政年間(1789~1801)に駿河国藤枝の田中城で、紀州から温州みかんの苗を取り寄せ植えた、という記録があることから、その頃には既に紀州で栽培されていたことがわかるが、子宝運を授かると喜ばれた紀州みかんに対して、種のない温州みかんは縁起が悪いとして市場からは敬遠されていた。しかしながら明治維新以降は、手軽に食べることができ、また品種改良によってより美味



温州みかん

味となっていったことから、温州みかんの需要が高まっていたようである。明治15年(1882)の『紀州柑橘録』には、「新たに開園する者温州蜜柑を植えざる者なし、今後紀州の柑橘園の増加により温州の産出が増えること疑いなし」の記述があり、転換の過渡期であったことがうかがえる。事実、これ以降は温州みかんの栽培が主となって、現在では紀州みかんの生産は、正月飾りなど限られた用途のみとなっている。

### 湯浅町のみかん栽培と三宝柑

湯浅町におけるみかん栽培の黎明期がいかなるものであったかは、当時の文献等は残されていないが、『田栖川村郷土誌』には、「糸我村に最も近接せるを以て、早く移植せられしこと疑なし」との記述があることから、有田へのみかん移入からそう遅れない時期には、町内でみかん栽培が行われていたことが推測される。正徳4年(1714)の有田郡27蜜柑組株のうちに湯浅の名が有るため、少なくとも江戸中期には栽培がされていたことは疑いない。この時、湯浅組株は、同じ郡内の船坂村、辻堂村、下中島村の組株とともに、江戸堀江町福島屋忠八という問屋と取引を行っている。また、幕末から明治になると、大阪方面へのみかんの積み出しに湯浅港も利用されるようになっていく。

湯浅の柑橘栽培において特筆すべき点として、三宝柑の主要産地であることがあげられる。三宝柑は、江戸時代に和歌山城下の藩士の邸内に発生した変種であるといわれ、紀州藩主徳川治宝はるとみに献上したところ喜ばれ、それ以来門外不出とされていた。明治になって、旧吉備町の大江城平(竜眠)が有田へ、それを田栖川村長も勤めた豪農、栖原ちかわの千川安松やすまつが、明治13年(1880)に穂を貰い受けて栖原で栽培を始めたのが、湯浅における三宝柑栽培の最初であるとい



三宝柑と石積みの段々畑

われている。最盛期の昭和40年代では、2,000トンを越える生産量があった。

三宝柑は、200~300グラムで、果こう部が高く盛り上がり、その基部にくびれがあるのが特徴

で、果皮は薄黄橙色をして表面に凸凹が有り、やや淡白な味ではあるが、さわやかな香りがあり優れた風味を持つ柑橘類である。

出荷の最盛期は3～4月で、栽培には冬季に温暖な気候であることが必要である。冬場に冷え込むと、す上がり果（果実に水分が少なくスカスカになる）が発生しやすくなる。主に生果として消費されるが、シャーベットやゼリーといった加工品にもなる。果皮は厚いので、ゼリーや茶碗蒸しの器として利用されたり、お風呂に浮かべて香りの入浴剤としても利用されたりする。最近では、生産量自体は減少し、年間500トンを下回っているが、希少で高級な商品として根強い人気がある。



三宝柑

### びわ栽培の沿革

田を中心に、びわの栽培も盛んである。大正（1912～26）の初頭に編纂された『田栖川村郷土誌』では、「本村の特産とも称すべき<sup>びわ</sup>枇杷は、世に田村枇杷と称し<sup>めいせいさくさく</sup>名声嘖々たり。」と表現されている。湯浅におけるびわ栽培の歴史について、『田栖川村郷土誌』では2つの説を紹介している。ひとつは、天正年間（1573～92）の始め頃、中村某が、どこかは不明だが、他所から持ち込んで田で栽培を始めたとする説、もうひとつは、元禄年間（1688～1704）に伊達宇兵衛が山中で野生のびわを発見して栽培を始めたとする説である。いずれにしても、その歴史は古く、大坂を中心に販路を広げて、明治の始め頃には隆盛を極めた。しかしながら、交通機関の発達により長崎をはじめとする九州地方の産地が大阪市場に進出してくると、その需要は大きく落ち込んだ。栖原の千川安松は、<sup>ちようせんびわ</sup>朝鮮枇杷を取り寄せ品種改良を進めて、<sup>ちかわびわ</sup>早晚二種の千川枇杷を生み出して、再び本場の名を市場に響かせた。



びわ

びわは、年平均気温15度以上で、冬場の気温がマイナス5度を下回らないことが栽培に必要な条件といわれている。冬場に花が咲き、春先には摘果作業と同時に実に袋を掛けてしまうため、木に橙色のびわの実がなっている様子は観察できない。5～6月にかけて収穫の時期をむかえる。

和歌山県におけるびわの生産は、旧下津町<sup>にんぎ</sup>仁義地区を中心に栽培が盛んな海南市に生産量の第一位を譲っているが、甘くて上品な味わいの田村びわは、市場での高い評判を誇る。



袋掛けされたびわ

### 石積み段々畑でのみかん・三宝柑・びわ栽培の景観

湯浅町は、周囲を山地に囲まれ平地が少ない地形である。その地形を活かし、山の斜面を利用して、石を積み上げて作られた段々畑が形成されていった。段々畑を作る石垣には、土留めの効果だけでなく、保温や排水、さらには光の反射効果などがある。みかんや三宝柑、びわの栽培には、十分な日照量が必要で、不足すると栄養が蓄えられず、生育に悪影響を及ぼすが、石が積み上げられた段々畑では、太陽光が石垣に反射し、四方八方から作物に当ることになるので、多くの日照量を確保することが出来るといわれている。また、日中に暖められた石垣は、夜になると保温効果を発揮し、さらには石垣の排水性の良さは大雨が降っても余分な水がたまらない、といった効果をもたらしている。



傾斜地にある石積みのみかん畑

第2次大戦後、いわゆる、みかんブームと呼ばれる全国的な増殖の流れの中で、湯浅町内においても段々畑の増設と、平地の水田からの転換が進んでいった。あわせて、生産技術の革新的な発達により、品種改良が進むとともに、スプリンクラー営農や単軌条運搬機（産業用モノレール）の導入が、傾斜地での栽培を大きく進歩させた。

「田村みかん」は、有田みかんの中でも屈指のブランドとして著名である。海に近くミネラル豊富な潮風と、温暖な気候に恵まれた田村みかんは、甘味と酸味のバランスがよく、最高品質であると、消費者から好評を得ている。

江戸時代から続くみかん栽培は、土地の制約を乗り越え、山々を切り開いて、工夫を重ねながら進歩させてきた技術により伝えられてきたものである。今、湯浅町におけるみかんの栽培面積は307ヘクタールで、出荷量は5,670トン（栽培面積及び出荷量は平成25年（2013）産の値）と、県全体からみると3.67%にとどまっているが、県土全体に占める湯浅町の面積の割合が0.44%であることを考えると、みかん栽培が盛んな地域であることは十分に理解できよう。



田村みかん



みかんの花

毎年5月初旬になると、みかんの木には白く可愛らしい花が一斉に咲き誇り、みかん畑の一带は爽やかな甘い香りに包まれる。夏を迎える前には青い実

を付けはじめ、盛夏を乗り越え、涼しが増す秋になると極早稲、早稲の収穫が始まり、年末には出荷のピークを迎える。みかんが収穫できるようになるまでには、枝の剪定、施肥、除草、摘蕾、摘果、灌水、薬剤の散布など、一年中世話をしなければならず、繁忙期には収穫した後の選果作業を不眠不休で行う。長い年月の間、こうした努力や工夫を重ね、上質な柑橘類が栽培され続けてきた。

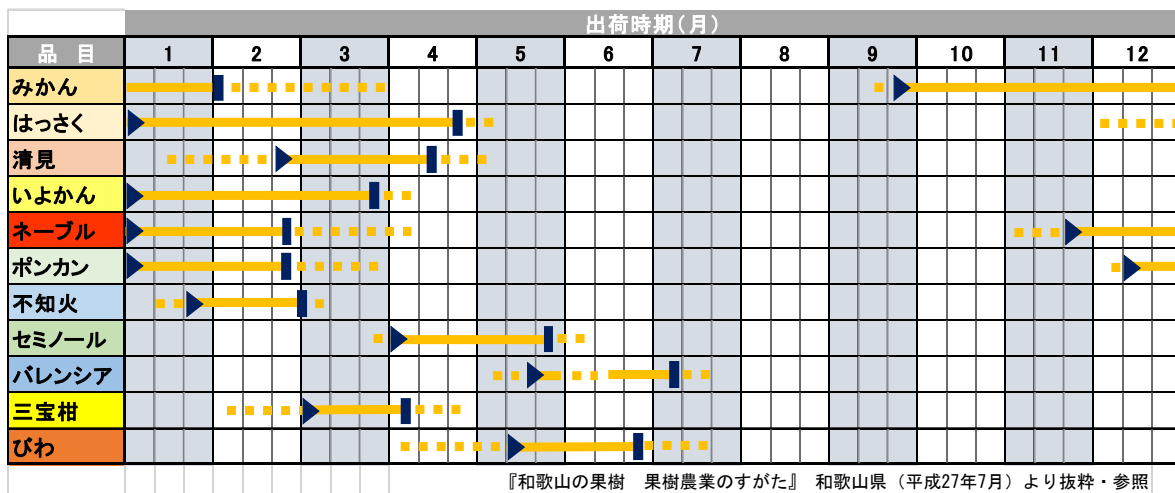


みかんの収穫

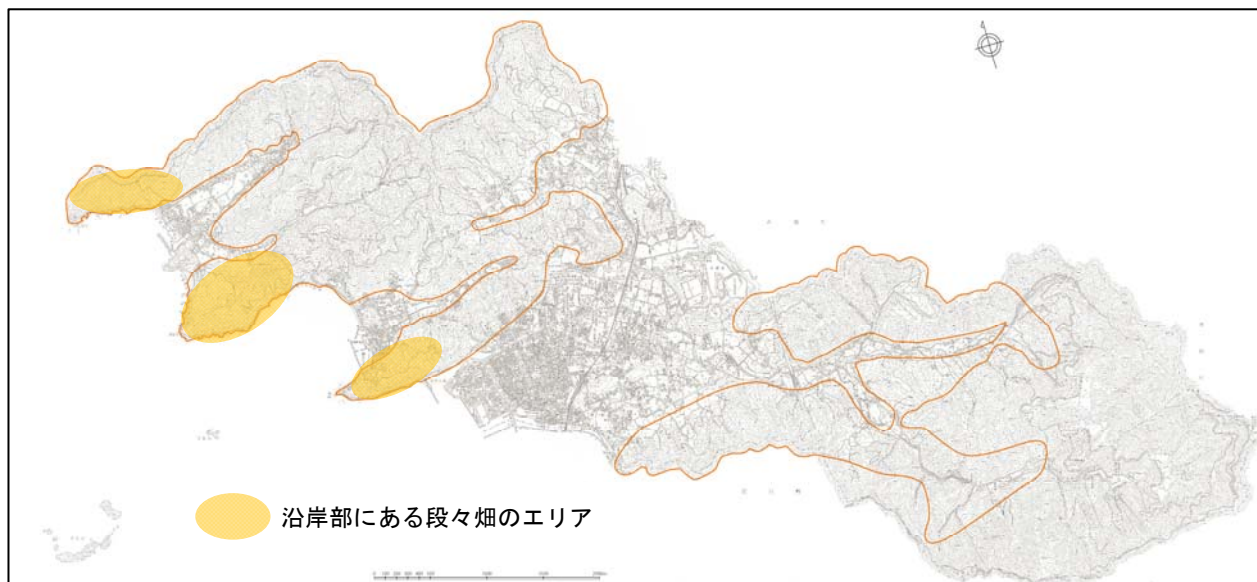
石積みの段々畑で栽培されるのは、みかんだけではない。栖原では三宝柑が、田ではびわの木が、それぞれみかんの木と隣り合わせで育てられ、季節ごとに違った表情を見せる。特にこれらの地区では、石垣が積まれた段々畑と湯浅湾とが同時に望める景観が特徴的である。また、近年では、多様な柑橘類も数多く植えられている。先祖たちが湯浅にそそぐ自然の恵みを最大限に利用して、一つ一つ文字通り積み上げて造り上げた石積みの段々畑でのみかん、三宝柑、そしてびわといった農作物栽培の姿は、地域の特徴ある文化的景観として受け継がれている。



湯浅湾に臨む三宝柑畑



湯浅町で栽培されている主な柑橘類とびわの出荷時期（実線は最盛期、点線はその前後の期間を表す）



みかん・三宝柑・びわ栽培に見る歴史的風致の範囲